琉球大学学術リポジトリ

規制緩和時代における音楽鑑賞の授業をどうつくるか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 津田, 正之, Tsuda, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1927

規制緩和時代における音楽鑑賞の授業をどうつくるか

津田　正之*

How are Music Appreciation Classes in the Deregulation Age Created ?

Masayuki TSUDA

はじめに

平成14年度完全実施の学習指導要領（平成10年告示）は，より規制緩和が進められたものであった。教育課程全体では，総合的な学習の時間の創設，選択教科幅の拡大，単位時間数の弾力化，各教科の内容においては，教育内容の厳選，２学年単位の授業内容の許容（小学校）などである。

音楽科においても同様であるが，とりわけ音楽科独自の規制緩和では，小学校歌唱共通教材を除く「共通教材の廃止」が特筆すべき事項である。鑑賞の領域では，小・中学校の鑑賞共通教材がすべて廃止となり，鑑賞の内容と観点のみの記述となった。教材数の指定もなくなった。この改訂は，教師の教材選択の幅を広げ，柔軟で創意工夫のある鑑賞の授業を展開できる余地を広げるものである。鑑賞の領域における大きな改革であると言ってよい。

一方，周知のように音楽科の授業パラダイムは，1990年代に入ると，教師主導型から子ども主体型へとシフトしていった。今回の学習指導要領・音楽の改訂を進めた文部省教科調査官（当時）の金本正武は，鑑賞共通教材の廃止に関わって次のように言う。

「今回の改善では，子供たちが様々な音楽に楽しくかかわり，創意工夫を生かしながら楽しい音楽活動を展開できるようにすることを目指す観点から，楽曲の選択幅を広げるとともに，子供たちや教師が学習内容にふさわしい楽曲を自ら選んで学習を進めることを重視している」[1]

鑑賞共通教材の廃止は，子ども主体型の授業を鑑賞の分野においても，積極的に展開することを企図した改訂と理解することができる。

・柔軟で創意工夫のある授業
・子ども主体型の授業

規制緩和時代における鑑賞の授業づくりの方向性をこのように整理しておこう。鑑賞の授業づくりは，規制緩和の21世紀に入り，新しいステージを迎えていると捉えることができる。

常識的に考えて，こうした方向性には大きな異論はないであろう。問題は，規制緩和時代における鑑賞の授業を，どのような理論と方法をもとに，具体的にどのようにつくっていったらよいか，という点にある。

鑑賞領域における教師の自主裁量の拡大という方向は，一方で，鑑賞の授業を自ら構成していく力量がより問われることになる。そのための指針となる具体性のある理論と方法が求められている。

本稿は，こうした点も踏まえながら，規制緩和時代における鑑賞の授業づくりのための視点を，私の授業の実際と授業づくりの過程を主な素材として提供しようとするものである。

* 琉球大学教育学部　音楽教育教室

1．曲名にピッタリする演奏を選ぼう
―《くまんばちは飛ぶ》聴きくらべ―

まず，教育学部の学生を対象にした授業の事例を示す。[2]

リムスキー・コルサコフ作曲《くまんばちは飛ぶ》（以下，くまんばちと略記）という音楽作品がある。くまんばちの大群が大きな羽音を立ててぐるぐると飛び回るようすが見事に描写されている1分少々の作品である。[3]

この音楽作品をいろいろな演奏形態で鑑賞させ，どの演奏が1番曲名にピッタリするのかを学生に選ばせる授業である。

次のプリントに記入させながら進める。

曲の名前［　　］は飛ぶ　　作曲した人［　　］

	楽器の名前（予想）	楽器の名前（答え）	コメント
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			

曲の名前に一番、ピッタリするのは、どの楽器の演奏でしたか。［　　］

【その理由】

学習過程は，以下の通りである。枠囲い，『　』は教師，「　」は学生の主な発言である。

（1）曲名を予想する

・プリントを配布し，次のように板書する。

〔　　〕は飛ぶ 作曲者〔　　〕

これから聴く曲の名前です。〔　〕に入ることばを考えながら聴きましょう。

・オーケストラ演奏の《くまんばち》を聴かせる。
・列指名で，〔　〕に入る言葉を発表させる。
「はえ」「ごみ」「こうもり」「ハチ」「ゴキブリ」‥‥などと答える。
ユニークな答えがでるたびに，笑いに包まれる。
・その後で，正解と作曲者〔リムスキー・コルサコフ〕を板書する。

（2）いろいろな演奏形態の《くまんばち》を聴く

いろいろな楽器の演奏による《くまんばち》を聴きます。全部で10の演奏があります。
メロディーを演奏している楽器の名前を予想して，プリントに書きましょう。

・次の楽器がメインの演奏を１つずつ聴かせる。音源一覧（後掲）参照

1. トランペット　2. トロンボーン　3. フルート　4. クラリネット　5. オーボエ
6. バイオリン　7. マリンバ　8. リコーダー　9. 男性のアンサンブル　10. 二胡

・１曲ごとに，プリントに予想を書いたことを確認し，楽器の名前を確認しながら解答する。
その際，次のような演奏の背景についての興味深い事実についても，適宜情報を与えたり，クイズを出す。
・１は，セルゲイ・ナカリャコフという14歳の少年の演奏である。
・１，２，５は循環呼吸という方法で，鼻からブレスをしながら（同時に口から）演奏している。
・７は，エヴェリン・グレニーという耳の聴こえない奏者が演奏している。
・９は，キングズ・シンガーズという男声のボーカルアンサンブルグループである。
男の声か女の声か，何人で歌っているか（６人）も問う。
・10は，どこの国の楽器か予想させる。二胡の写真も見せる。

大学生47名の平均正解率は，6.7問／10問，最低４問，最高10問であった。
楽器別の正解数と率は次の通り。[4]

1. トランペット（45）	→ 95.7%	6. クラリネット（31）	→ 66.0%
2. 男声のアンサンブル（44）	→ 93.6%	7. リコーダー（29）	→ 61.7%
3. マリンバ（43）	→ 91.5%	8. トロンボーン（26）	→ 55.3%
4. ヴァイオリン（42）	→ 89.4%	9. オーボエ（17）	→ 36.2%
5. フルート（32）	→ 68.0%	10. 二胡（12）	→ 25.5%

・リコーダーはピッコロ，トロンボーンはホルンの誤答が，オーボエは楽器名が空の学生が目立った。

『もうひとつおまけです。
玉木宏樹さんの大冗談音楽会の演奏です』

超（　　）技　巧

・次のように板書する。
『玉木さんが，演奏のタイトルにつけた言葉です。（　　）に入ることばを考えながら聴いてみましょう』
・ヴァイオリンを弾きながら，階名で歌っている演奏である。
・学生たちは笑いに包まれる。挙手で指名し，学生に板書させる。
・正解は「超（舌）技巧」である。なるほど，というどよめきが起きる。

（3）曲名に一番ぴったりする演奏形態を選ぶ

今まで聴いたなかで，曲の名前に一番ピッタリする楽器の演奏を一つ選んで下さい。 もちろん声も楽器です。また，なぜその楽器を選んだのか，その理由も書きましょう。

・学生47名の選択結果と主な選択理由を示す。１名重複回答あり。

１．バイオリン　１４人

・ハチが四方八方に瞬間的に移動しながら，森の中を飛んでいるような感じがする。・何かに追われて必死に逃げている様子がイメージできたような気がした。・とてもせわしい感じがしてハチがブンブントンでいるような響きの音だった。・音がハチの羽音とかすっていたから。・バイオリンのほうがするどくて細くてとがっている感じがする。・ものすごい速さで迫ってきて刺しているみたい。・キュッキュッっていう音がなんだか心をあせらせる感じがして，ハチの落ち着かない動きにぴったりな気がした。・バイオリンのキーキーした音がくまんばちが暴れて飛び回っている感じにあっているから。・弦をはじく音が何かを毒針で刺しているような感じであった。・吹いてでる音色より弾いてだす音色の方がハチが飛んでいる感じがしたから。・弦をはじけるし音の高さもハチっぽい。かつ変化がある気がする。

２．男声のアンサンブル　１１人

・ハチが飛んでいる感じ，羽が重なって出ている音の感じがとてもしたから。・ハチも人間も生物だから。楽器よりは人の声のほうがハチの飛ぶ音がリアルになると思ったから。・人の声でこれを演奏しようという考えもおもしろい。・息圧がなんかすごく，くまんばちが迫ってくるような感じをだしていたように思う。・ハチのブンブンとんでいるイメージが一番わいたし、音もはっきりとブンブンと聞こえたから。・人間にとって邪魔な不快な音だった。ましては男６人の部分がなおさらむさ苦しい。・「ハチ＝速い,怖い,ブンブン（羽の音）」が一番出ていた。

３．トランペット　９人

・音が高すぎず低すぎずにブーンと飛ぶハチがうまく想像できたから。・くまんばちの強さ，攻撃力や集団で行動する力が トランペットの音の力強さや響きにあっていたから。・うるさい羽音の感じがまさに「ハチ」っぽくて一番あっている感じがした。・くまんばちのなんだか暗く後ろから迫ってくる感じがでていたし，怖い感じがでていたから。・トランペットの高いキーとした音もハチの速く飛ぶイメージにぴったりだった。・すごくすばしっこくてはやいハチの想像がつく。・音色の高さや響きがくまんばちの鋭さや恐ろしさなどに一番あっていると思ったから。

４．マリンバ　５人

・スピード感があり，ハチが来たって感じが一番強い気がする。・聴いていて何か聞きやすかった。・ハチが飛んでいる感じを音の強弱を使ってうまく表現していた気がした。・まるまる太ったくまんばちがぐるぐる回転しながら飛び回っている様子が目に浮かぶ。他の楽器と比べてテンポが速くなっても聴きやすかった。

5．トロンボーン　3人

・ちょっと重いかんじが「くまんばち」って感じがした。・高い音よりも低い音ですばやい感じが危険そう。こわそう。

・重低音がきいていてハチが飛ぶ音にふさわしい。

6．クラリネット　2人

・クラリネットの軽やかな音が，ハチの飛んでいく様子（ブーンブーン）と重なって，目の前で本当にハチが飛んでいるように聞こえた。・激しい曲調だったが耳が痛くなるような感じではなくすんなりと耳にはいってきて聴きやすかった。無理がない音色だったと思う。

6．オーボエ　2人

・小さい生き物が飛んでいる感じが一番した。・ちょっとブーンというにごった音がしそうだけど，すばやく動いている様子が感じられるから。

6．二胡　2人

・がさがさした感じが，ハチが飛んでいる姿を思い出させるから。・弦楽器のギーギー加減がハチっぽいから。

（4）いろいろな感じ方を発表し合う

・どんな楽器を何人選んだのかを，挙手で確認して板書する。
・それぞれの楽器を選択した理由を，何人かの学生に発表させる。
・学生たちは，自分と違う意見も共感的に聴いているようすであった。

・当初は次のように考えていたが，時間が十分にとれなかったため，口頭で意見を発表させて終わった。

・挙手で楽器選択の数を把握し，それを考えて黒板をたてに10のスペースに区切る。学生たちに選択した理由を板書させる。そして次のように言う。

黒板に書いてあることを見て，思ったこと，感じたこと，気づいたことを発表しましょう

・どんな意見も認める。教師学生の意見の交通整理役をする。
・できるだけ，音楽表現（音色，高低，強弱，速さ etc.）に則して話すように促す。

この授業は，概ね学生に好評であった。

・いろいろな楽器を演奏をまとめてたのしむことができた。
・同じ曲でも，いろいろな楽器や声によって，表現がかわることがわかった。
・人によって，いろいろな感じ方や意見があることがわかった。

に類する感想を述べていた。

この授業の解説で，学生たちに伝えたのは概ね次のようなことである。

A．教材構成型の授業をつくる
　・素材のおもしろさに目を向ける
　・比較聴取を仕組む

B．正解のない内容で授業をつくる

これらの点は，規制緩和時代の鑑賞の授業づくりのための有力な視点となる。とりわけAは教材構成レベル，Bは方法レベルに示唆的である。以下，本授業の内容をひきつけながら，これらの点について述べる。

2．教材構成の理論と方法から学ぶ

一般的な授業づくりの方法を教材レベルからみると，教材解釈，教材構成という言葉で説明する

とわかりやすい。音楽の授業づくりも同様である。次のように説明される言葉である。

「教材解釈とは，教えるべき素材がすでに教科書などによって決まっているという前提にたって，そのうえで，その素材（教材）を教師がどのように受けとめ，理解し，意味づけるかというふうにすすめられる教材研究のあり方を指している。……（略）……それに対し，教材構成とは，教師自ら特定の教育内容を教えるという目標を明確にし，それにふさわしい教材を自由に選択，組織するという，根本的に異なる発想を基盤にもつ仕事なのである」[5]

ア・プリオリに設定された鑑賞共通教材を前提とした授業は，まさに教材解釈型の授業になる。音楽作品をいかに解釈して教えるかという作業が授業づくりの中心となる。これまでの鑑賞の授業は，結果的に教材解釈型が多かった。

一方，それと対極にあるのが教材構成型である。教師の創意工夫のある授業を目指すのであれば，それは教材構成型の授業づくりを追究することになる。教育内容ととりむすびながら，教師が創意工夫を凝らして「主体的」に教材を選択・組織していくあり方である。

もちろんこうしたあり方は，授業づくりの作業として当然のことである。しかし，当然のことが，多くの音楽教師の間で必ずしも共有されてきたとは言えない歴史と現状がある。元文部省教科調査官の小原光一は，次のように言う。

「……共通教材の指定によって先生方が音楽を聴かなくなったこと。子どもたちにとって，あるいはもって適切なよい曲があるかもしれない，そういう探究を怠ってしまったこと。毎年扱う共通教材についてはそれこそ重箱のスミを突っつくくらいに詳しく知っていながら，それを他の曲にも及ぼそうとする態度を忘れてしまった，そのために音楽的な広がりや深まりが……なくなってしまった……これが暗の部分ではないかと思います」[6]

小原は，鑑賞共通教材の指定が，教師の教材選択における自主性の退化を導いたという現実を指摘している。

こうした現状も踏まえつつ，教材構成型の鑑賞の授業をどのようにつくったらよいのか。以下、授業づくりの方法的な視点を述べる。

2．1　素材のおもしろさに目を向ける

一般的な教材構成型の授業づくりは，教育内容から教材を導く方向をたどる。たとえば「ロンド形式の理解」を教育内容として設定し，ロンド形式の理解につながる具体的・典型的なさまざまな教材を選択・組織することになる。授業づくりの王道といってよい方法である。

しかし，こうした方法だけでは，必ずしも魅力のある教材開発につながらないことも多い。教育内容を具体的・典型的に担っていたとしても，教材自体のインパクトが弱いケースもある。教師自身が扱う教材を自信をもって子どもたちに提示できないとき，魅力的な授業にはなりにくいからである。

やや旧聞に属するが，藤岡信勝は，教材構成の方法として，教育内容から教材へ下降する方法を「上からの道」と呼び，それに加えて，教材から教育内容へと進む「素材の教材化」というべき「下からの道」を提案している。

「われわれは，日常さまざまな情報に接しているが，その中で，子どもの興味や関心をひきそうな事実にゆき合うことがある。そのとき，素材のおもしろさがまず発見され，しかるのち，事後的にその事実を分析し，おもしろさの意味を反省して，その素材がどんな教育内容と対応しうるかという価値が見いだされる。このような過程を指して，教材構成における『下からの道』というわけである」[7]

鑑賞の授業をつくる上でも，こうした視点に立つことが有効である。教師の柔軟な発想を生かした授業をつくりやすく，かつ教材自体のインパクトが強い授業を構成できるからである。鑑賞の教材選択の視点を身近なものにするとともに，教材選択の幅を広げてくれるからである。そして何よりも，こうした素材探しと授業づくりの作業は，よりよい授業を目指す教師にとって，魅力的でたのしいものだからである。

2．2　下からの道による授業づくりの過程

《くまんばち》の鑑賞の授業は，結果的に，教材構成における「下からの道」でつくったものであった。その過程を述べてみる。

私は趣味と実益を兼ねて，よくＣＤショップを

のぞく。そのときに「何かおもしろい素材はないだろうか」という目でさまざまな音源や映像を見ることにしている。よくながめるのが，楽器別のＣＤコーナーである。各楽器の名プレイヤーが収録するＣＤに共通に見られる曲のひとつに《くまんばち》があることに気づく。この作品は見事な描写音楽である。教材自体にインパクトがある。さらに１分少々の曲である。これぐらいの長さだと，集中力の乏しい子どもたちでもある程度集中できると想像できる。そして多様な音源がある。ＣＤショップを回って23の音源（次頁参照）を集めた。

音源を聴く。技術的に難しい曲だが，どの形態の演奏も見事である。そしていろいろな事に気づかされる。演奏形態によって，さまざまな表現がある。またくらべて聴くことによって，メロディを演奏する楽器の音色の違いがリアルにわかる。さらに同じ楽器による演奏でも，演奏者や演奏形態によって表現方法が違う。金管楽器では，循環呼吸という難易度の高い技巧で演奏していることも聴きとることができる。

ユニークな演奏形態もある。キングズシンガーズというイギリスの男声６人組のアンサンブル（音源21）は，声による超絶技巧のアンサンブルである。玉木宏樹の冗談音楽（音源23）は，階名（もどき）で歌いながら，バイオリンを演奏している。タイトルは「超舌技巧による“熊蜂の飛行”」である。パロディのおもしろさがある。

ＣＤの解説を読む。「このトランペットは，14歳の美少年が演奏している。循環呼吸を使い，鼻からブレスをしながら（同時に口から）演奏している」（音源１），「このマリンバ奏者は耳が聴こえないんだ」（音源17）など，興味深い事実にもゆきあたる。

こうしたことを素材に授業がつくれないかと構想してみる。藤岡のいう「下からの道」である。その作業は，素材がどのような教育と対応するかを問いながらなされることになる。私はこうした素材をもとに次のような教育内容を想定してみた。

Ａ．標題・描写音楽のおもしろさ
Ｂ．いろいろな楽器（声）の音色
Ｃ．すぐれた演奏テクニック
Ｄ．すぐれた奏者についての知識
Ｅ．演奏形態による表現の違い
Ｆ．同一楽器による演奏形態や演奏者による表現の違い
Ｇ．音楽の感じ方や評価には，一義的な正解はない

一般に授業の目標として記述されるのは，教育内容の獲得形態（etc.感じとる，知る，理解する）を記述したものである。授業づくりの際，教育内容にアプローチするために，教材を構成し，子どもたちが身をのり出して鑑賞できるような手だてを具体的に工夫することになる。またその過程で，教育内容を加除修正することもある。

こうして構想したのが，本項１で紹介したプランである。本稿１の学習過程と教育内容を対応させながらコメントしてみる。

学習過程の（１）は，教育内容Ａに対応する。Ａの内容を授業に即して言葉にすると，たとえば次のようになる。

「この曲は《くまんばち》という標題がついてます。音楽でくまんばちが群れになって飛ぶようすをよく描いていますね」

こうした場面はよく見られる。しかし，伝えたいこと，感じてほしいことをそのまま言ってはつまらない。さらに，どう感じるかの判断は基本的に子どもたちに委ねられるものである。具体的な鑑賞活動を通して，感じてくれたらよいことである。問題はどのような場で感じさせるかにある。

本授業では，標題あてクイズを考えてみた。まず，純粋にしっかり音に耳を傾けて，標題を想像させる。この場合，想像した標題を自由に言わせてもおもろしろい。だが，自由度が高すぎてむしろ答えにくいことになる。〔　　〕は飛ぶ，と板書し，「何が」飛ぶのかに限定することにより，思考が活発になり，全員が参加しやすくなる。

学習過程の（２）は，Ｂ，Ｃ，Ｄに対応する。さまざまな楽器やテクニックに触れさせるには，どのような聴かせ方がよいのか，またどのような種類の，どの程度の音源の数が適切かを考える。この作業は学習者のレベルを想定しながらなされることになる。

この場合，楽器当てクイズを仕組んでみよう。クイズにすることで，学習者に適度な挑戦性が生まれる。二胡を除いた楽器は，小学校高学年以上の子どもは，学校の授業の場をはじめ何らかの形

《くまんばちは飛ぶ》音源一覧　――太線囲いは授業で用いた音源――

	演奏形態（　　）伴奏	演　奏　者	CD番号
1	**オーケストラ**	アシュケナージ指揮／ロイヤル・フィル&フィルハーモニア管弦楽団	POCL−5179
2	**オーケストラ**	アンドレ・クリュイタンス指揮／パリ音楽院管弦楽団	TOCE−7118
3	**トランペット**（ピアノ）	セルゲイ・ナカリャコフ	WPCS−6402
4	**トランペット**（オーケストラ）	ウイントン・マルサリス	SRCR−9293
5	**トロンボーン**（ピアノ）	クリスティアン・リンドベルイ	BIS−CD−9010
6	**ブラス・アンサンブル**（トランペット2、トロンボーン、ホルン、チューバ）	カナディアン・ブラス	PHCP−21042
7	**フルート**（オーケストラ）	ジェームズ・ゴールウェイ	BVCC−37284
8	**フルート**（ピアノ）	ジャン・ピエール・ランパル	30CD−3054
9	**クラリネット**（ピアノ）	エンマ・ジョンソン	CRCB−151
10	**クラリネット**（ピアノ）	藤井一男	ALCD−7015
11	**クラリネット・アンサンブル**（B管3、バス1）	横川晴児、磯部周平、村井祐児、森川修一	KICC−70
12	**オーボエ**（ハープ）	宮本文昭	SRCR−2095
13	**ヴァイオリン**（ピアノ）	ヘンリック・シェリング	PHCP−20395
14	**ヴァイオリン**（ピアノ）	二村英仁	SRCR−2508
15	**チェロ**（ピアノ）	パブロ・カザルス	TOCE−11571
16	**チェロ**（ピアノ）	ガスパール・サカド	COCO−80744
17	**マリンバ**（オーケストラ）	エヴェリン・グレニー	BVCC−34022
18	**マリンバ**ソロ	神谷百子	PHCP−1479
19	**リコーダー**（ピアノ）	ミカラ・ペトリ	PHCP−1021
20	**ピアノ**ソロ	伊藤エイミーまどか	TOCE−6475
21	**男声アンサンブル**（男声６名）	ザ・キングズ・シンガーズ	TOCE−7864
22	**二胡**（オーケストラ）	許可（シュイ　クゥ）	BVCF−37021
23	**階名唱**・ヴァイオリン・ピアノ	玉木宏樹	COCO−78584

で聴取経験があると想像できる。だが，たとえば小学生では，具体的な楽器の姿と名前と音色を結びつけることは難しい。教科書の楽器一覧のページを参照させて選択させる。二胡については，楽器名は難しいので，どこの国の楽器か予想させる。一方，大学生レベルであれば，概ね楽器の形態はイメージできるだろう。楽器一覧の絵や写真は情報過多になる。

《くまんばち》は1分少々の作品である。クイズにしたときに区切りの良いように10問にする。金管楽器，木管楽器，弦楽器，打楽器，声，民族楽器などさまざまな種類の楽器を一通り網羅できる。10の演奏を聴かせても，鑑賞時間は12～13分である。十分に集中力が続く。

またDについては，多すぎると授業のテンポが鈍る。あくまでも，学生が興味をもちそうな次の事実に絞る。

・循環呼吸（音源3，5，12）
・14歳の少年の演奏（音源3）
・耳の聞こえない奏者（音源17）

また，この過程で次のようにも考えた。Fもぜひ扱いたい内容である。だが本授業でそこまで含めると内容過多になる。あくまでもメロディを演奏している楽器に絞った方がよいと判断できるので，本プランでは省く。その一方で，大学生には，玉木宏樹のパロディに触れさせる。

学習過程の（3）は，Gに対応する。この場合，曲の名前に一番ピッタリする演奏には一義的な正解はないということである。もちろん，その過程で他の内容についても思考することになる。

先にあげた教育内容のうちGだけカテゴリーが違っている。音楽鑑賞する際の基本的な構えや態度に関する内容である。Gの内容を設定する意義については後述する。

2．3　比較聴取を仕組む

本授業では，比較聴取を仕組んだこともポイントのひとつである。この有効性は《くまんばち》という作品の素材のおもしろさに着目し，さまざまな音源を集めて授業を構成し実践する過程で結果的に認識したことである。

なぜ比較聴取が大切なのか。ある音楽を聴き，それをどのように感受し，またどのように評価するのか。言い換えると，個人の音楽的な感受や価値観は，個人のこれまでの音楽学習や音楽経験との相対的な比較において培われるものだからである。その意味で，有意味な比較聴取を組織することは，個々人の音楽的認識や価値の形成につながると考えることができる。

比較が成立するためには，何らかの条件を統制することが必要となる。そして条件の統制は「何を」比較聴取させるかという問題と関連する。「何を」は教育内容にあたる。

身近な例で考えてみよう。校内合唱コンクールをはじめ，コンクールの審査や音楽系大学の入学試験では，課題曲や同一レベルの試験曲から選択させることが多い。この場合，多くは演奏技術，音楽的な表現力を比較することになる。これは教育内容にあたる。同一楽曲や同一レベルの楽曲という条件を統制することで，曲の難易度や表現技法の違いというバイアスが減り，演奏技術，音楽的な表現力などの比較がしやすくなるからである。

本授業では，同一楽曲を条件統制とすることで，主な演奏楽器の音色，演奏形態による表現を効果的に比較させることを企図した。同じ楽曲であるがゆえに，比較聴取の際，聴き手は主な演奏楽器の音色や演奏形態による表現違いに焦点を当てて聴くことができたのである。

ところで，本授業の場合，先に触れたように，はじめから何を比較聴取させるのかが明確であったわけではない。さまざまな演奏形態による《くまんばち》の音源のおもしろさをもとに，そこから何を比較聴取させたらよいのかを結果的に導き出したものである。

その意味で，比較聴取をどう仕組むかは，一方で比較聴取の教材となる興味深い素材探しと連動する作業でもある。

一例をあげる。にぎやかなデキシーランドジャズの演奏で知られるアメリカ民謡《聖者の行進》は，じつは葬送曲である。一般的な葬送曲のイメージとは大きく違う意外性のある素材である。さまざまな教材化の可能性がある。[8]

比較聴取の視点から教材構成考えると，《聖者の行進》を含む世界のさまざまな葬送曲を聴かせ，表現の違いやその背景を比較させる，といった授業を仕組むことは十分に可能であろう。

3．正解のない内容と出力

鑑賞の授業では，客観的に教えうるものと，そうでないものがある。前者は，音楽作品の形式や表現方法，楽器の音色や組み合わせなど，客観的に聴きとることができるものである。一方後者は，音楽を聴いてどのように感じるか，どの演奏を評価するかといったきわめて主観的な内容である。いわば一義的な「正解のない内容」である。

鑑賞の授業では，集団が共通に聴取できる客観的な内容だけではなく，一義的な正解のない内容も大切である。たしかに音楽の感じ方には正解はない。正解のない内容を，教師の主観で教えようとするところに押しつけがうまれる。だが，教えることはできなくても，個人の感じ方を認め合いながら，その感じ方の幅や深みを高めていけるような場をつくることできる。

自分なりの感じ方をもつとともに，それらを相手によく伝わるように発信し，一方で他者の感じ方を共感的に受けとめ，そこから何かを学んでいく，といった鑑賞の授業である。

後者（正解のない内容）を大切にした授業づくりを構想する際，小西正雄の提唱する出力型授業観とその実際から学ぶことが多い。小西は授業を「子どもに何かを身につけさせる場」として組織するのではなく，「子どもがもっている何かを出させる場」として組織し，子どもの認識を高めていく方向へと授業組織の構えを転換していくことを主張する。前者を入力型授業観，後者を出力型授業観察と呼ぶ。[9]

では，出力型授業観による授業の実際はどのようなものか。社会科で校区の消防施設について学ぶ授業を例にするとわかりやすい。

「あと一つだけ消火栓をつけるとすると，どの地区につけるといいでしょうか」

という問いのもとに，子どもたちが提案し，互いの意見を比較検討することで，価値判断力を高めていく授業である。[10]

実践報告からは，子どもたちがじつに活発に動いていたことを読みとることができる。

こうした提案する社会科論を基盤とした出力型の授業には，次の特徴がある。

・子どもたちに提案させている。
・（提案をめぐって）意見の練り合いがある。
・一義的な正解がない。

こうした特徴が，子どもたちの活発な動きを促していると考えられる。そして，こういった特徴を促すのが，子どもたちにとって魅力的な提案のさせるための「場」づくりである。じつは「場」が有力な指導して働いているのも出力型授業の特徴である。

《くまんばち》の鑑賞の授業では，前項で触れたように，一義的な正解のない内容を設定したこともポイントである。学習過程の（3）の部分である。学生たちの提案場面でもある。

曲の名前に一番ピッタリする演奏には，一定の傾向はあっても一義的な正解はない。だが，正解はなくても，またないがゆえにさまざまな音楽的な感受をみることができる。多様な感受の仕方を知ることができ，そこから多様な聴く視点を教えられる。違う感じ方を共感的に受けとめようとする態度形成にもつながる。

もっとも，本授業の場合，実際には意見分布を板書し，何人かの学生にその理由を発表させて終わった。音楽的な感受を十分に発信し合い，練り合い交流するまでに至っていない。さらに言えば，発信・交流をどのようにコーディネイトするか，という点についても，実践をくぐらすことはできず，こうした点でも課題を残したものであった。

しかしながら，学生たちの感じ方を出力させることには，一定成功したと考えている。

不十分さを残しつつも，正解のない内容を設定し，それと連動して子どもの感じ方を出力させる場を工夫することが，子ども主体の鑑賞の授業をつくる際の重要な視点になる。この点を本実践を通して実感することができた。

4．規制緩和時代における音楽鑑賞の授業づくりの展望

本稿では，規制緩和時代の鑑賞の授業づくりの視点について，大きく２つに集約する形で述べてきた。こうした視点から，鑑賞の授業のデッサンを提示したり，開発しているところである。[11]

最後に，子ども主体型を大胆に進めた鑑賞の授業づくりの方向を展望してみることにしたい。そ

れは，音楽作品を中心とした教材研究に依拠しない「場」づくりを中心とした授業である。

《くまんばち》の鑑賞の授業では，どの教材をどのように聴かせるか，は自明のことであった。教師の教材研究をもとに，教師の敷いたレールの上で学習者の感じ方を出力させるものであった。その意味で，教師の教材研究に依拠した伝統的な授業づくりであったと捉えることができる。

本稿の「はじめに」で，当時の文部省教科調査官の文言を引用したが，このなかで目を引くひくのは，「……子供たちや教師が学習内容にふさわしい楽曲を自ら進んで学習をすすめることを重視している」（下線筆者）の部分である。教師だけでなく「子どもたちが自ら学習内容に楽曲を選ぶ」というかなり踏み込んだ子ども主体の考え方を示しているのである。

子どもたちが自ら楽曲を選ぶとなると，教材研究に依拠した伝統的な授業づくりのあり方も大胆に見直さざるを得なくなる。

それとともに，具体的にどうやって鑑賞曲となる音楽作品を子どもたちに選ばせるのか，また対応する教育内容をどのように設定するのか，という課題が浮き彫りになってくる。

この場合にも，前項で述べた「正解のない内容と出力」という視点は有効である。そして，とりわけ出力のための「場」づくり，子どもたちが思考を働かせて自ら動く魅力のある場づくりが，授業づくりの重要なポイントとなる。

こうした観点による鑑賞の授業づくり例として磯田三津子のプランを検討してみる。

磯田は，外国（アメリカ）の人に日本の音楽を紹介するのにふさわしい音楽を，子どもたに選ばせ，実際に楽曲の人に聴いてもらう鑑賞の授業を提案している。「日本の音楽を紹介しよう」というプランである。

プリントに沿って，概ね次のように行われる授業である。[12]

1．子どもたちは，それぞれプリントを完成させる。
2．班ごとに，お互いがもってきた音楽を聴く。
3．各班で「アメリカの子どもたちに紹介する音楽」1曲を選ぶ。
4．班ごとに選んだ音楽を，クラス全員で聴く。

プリント

名前 ＿＿＿＿＿＿

つぎの5曲は、アメリカの子どもたちが「日本の音楽」を勉強する時に「よく使われる音楽です。

・ずいずいずっころばし
・かえるのうた
・越天楽
・とうりゃんせ
・さくら

この5曲以外にアメリカの子どもたちに知ってもらいたい音楽を1つあげてください。具体的な曲名があげられない場合は、日本らしい音楽を作る作曲家や日本の音楽を演奏する演奏家、または楽器名でもかまいません。

また、なぜ、日本を紹介するための音楽として、その音楽を選んだのか、その理由を書いてみましょう。

できれば、その音楽についての解説も書きましょう。

5．できれば，それを英語のＡＬＴの先生や身近な外国の人に聴いてもらう。
6．その際に，外国の人から，その国の有名な音楽や好きな音楽を紹介してもらう。

次に示すのは，琉球大学教育学部学生の提案例である。[13]

《富士山》（文部省唱歌）
・ビジター（訪問者）が多いから。山の景色の美しさを音といっしょに味わってほしいから。
・日本的な情景をアメリカの子どもたちに知ってもらうため。

《花》（武島羽衣作詞，滝廉太郎作曲）
・日本の自然の美しさや季節のこと、情景をうたった歌を外国にアピールしたい。

《春の海》（宮城道雄作曲）
・着物を着て演奏しそうだから。

《うさぎ》（日本古謡）
・日本ぽいメロディ，日本の文化・風景が思い浮かぶ。おまけに簡単に覚えられる。

《てぃんさぐぬ花》（沖縄のわらべ歌）
・同じ日本の曲でも地方によって雰囲気の違いのあることを知ってほしいから。

磯田のプランでは，日本の音楽について考えたり，他の人の提案から，さまざまな考え方を学ぶことができる。提案された視点を意識しながら鑑賞することで，既知の曲であっても新たな鑑賞の世界が広がることも考えられる。特定の教材を前提にしていなくても立派に学習は成立する。

また，このプランは前述の出力型の授業を鑑賞の授業で展開した典型でもある。いわゆる提案ごっこである。あくまでも仮定の話である。このプランのすぐれているところは，単に子どもたちのごっこ遊びにとどまらず，実際に発信し，発信に対してリアクションの場を位置づけているところにある。英語のＡＬＴの先生や身近な外国の人に聴いてもらい，その国の有名な音楽や好きな音楽を紹介してもらう，という場である。

私は，以前，出力型の音楽授業のあり方について，當山，高橋とともに実践的提案をしたことがある。子どもたちが沖縄の音楽をＰＲするビデオ作品をつくり，北海道の子どもたちに発信するという授業を紹介しつつ，次のように述べた。

「私たちの提案は，ごっこ遊びの価値を認めつつ，さらに，子どもたちが目的に即して〈発信〉する学習へと発展させることにある。當山実践では，ＰＲビデオの作品制作で完結せず，実際に自分たちのＰＲビデオを発信し，それに対して反応があり，さらに新たな交流が生まれた‥‥。このように，実践に自分たちの提案を発信することが，より満足度の高い有意味な学習になった‥‥‥」[14]

子どもたちの出力をより有意味なものにするためには，鑑賞を中心とした授業であっても，こうした目的に則した発信を授業のなかに位置づけることも，規制緩和時代における鑑賞の授業を展望するひとつの有力な視点になると考えている。

本稿では，規制緩和時代における鑑賞の授業づくりについて，主に教材構成レベルや指導法レベルについて言及してきたが，一方で，教材を構成したり，出力の「場」をつくるためには，「何を」鑑賞させるのか，どのような能力を育成するのか，という鑑賞の教育内容に関する検討も不可欠である。教材構成で言えば「上からの道」の「上」にあたる部分である。

鑑賞共通教材廃止の背景には，学校や子どもたちを取り巻く音楽環境の変化も背景にある。とりわけ高学年以降の子どもたちにとって，自分の好きな音楽を選んで聴くというのはほぼ日常となっている。子どもをとりまく音楽環境の変化は，単に音楽文化の伝達という意味での音楽授業の相対的な役割を低下させている。学校ならではの，学校でなければできない鑑賞の授業のあり方が問われているのである。[15]

こうした状況をふまえながら，教育内容のあり方と取り結びつつ，どのようなコンセプトで鑑賞の授業をつくっていったらよいのかについても議論を活発化させていく必要があろう。[16]

註

1）金本正武「小学校学習指導要領の趣旨を読み取る（九）」『音楽鑑賞教育』No.375，音楽鑑賞教育振興会，1999年12月，10頁

2）2002年12月に「音楽科教育研究」（小学校音楽の指導法に関する科目）で実施した。

3）リムスキー・コルサコフの歌劇《皇帝サルタン物語》の中の作品。《くまんばち（くまばち）の飛行》と呼ぶことも多い。

4）トランペットはラッパ，マリンバは木琴，リコーダーは笛，男声のアンサンブルは人の声に類する回答，二胡は胡弓も可とした。

5）藤岡信勝「教材構成の理論と方法」，今野・柴田編『教育課程の理論と構造』学習研究社，1979年，274-275頁，

6）小原光一「今日的な教育の課題と音楽科のあり方（一）」『音楽鑑賞教育』No.385，音楽鑑賞教育振興会，2000年9月，９頁

7）初出前掲 5)，284頁，後に藤岡信勝『教材づくりの発想』（日本書籍，1991年，37-38頁）に所収。その際，「教材構成」を「教材づくり」に変更している。

8）たとえば拙稿「アメリカ民謡から歴史をみる」（八木編『子どもがノッてくる音楽鑑賞の授業』学事出版，2000年，101－105頁）を参照いただきたい。意外性のある音楽を切り口に，社会を読み解くことを企図したものであった。

9）小西正雄『消える授業残る授業』明治図書，1997年，57-57頁

10）高知市立朝倉小学校教西川康教諭の実践である（小西正雄『提案する社会科』明治図書，1994年，143-156頁）

11）たとえば，拙稿「さまざまな『さくらさくら』を聴こう」「『ふるさと』の世界にピッタリな演奏を選ぼう」（八木編『子どもがノッてくる音楽鑑賞の授業』学事出版，2000年，所収）を参照。

12）磯田三津子「日本の音楽を紹介しよう」，八木正一編『子どもがノッてくる音楽鑑賞の授業』学事出版，2000年，119-121頁

13）琉球大学教育学部，音楽科教育法Ｃの受講学生によるものである。2002年12月，これからの鑑賞授業のあり方についての講義のなかで実施した。提案した作品とその理由を板書させ，簡単な話し合いを組織してみた。

14）津田・當山・高橋「出力型の音楽授業に関する実践的研究」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』創刊（通巻８）号2001年２月，80頁

15）こうした点について拙稿を参照していただきたい。津田・儀間「鑑賞共通教材廃止の背景とその意味－音楽鑑賞指導の今後のあり方をめぐって－」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』創刊（通巻８）号2001年２月

16）こうした点については，次の著書が示唆的である。八木正一編『子どもがノッてくる音楽鑑賞の授業』学事出版，2000年，八木らは新しい視点に立つ音楽鑑賞の授業を具体的にプランの形で提示している。